

スタートのその前に

特別支援教育で

もっとも大切なこととは？

新年度の始まりは、新しい職場、新しい仲間、そしてなんととっても新しい子どもたちの笑顔に出会える季節ですね。

私たちは、新しい出会いを迎えると、期待とともに不安を感じるものです。

「特別支援」と言われても、まだまだ具体的なイメージがわかず、「専門的な知識がないから無理」「時間が無い」「人がいない」と負担に感じる先生がいらっしゃるのも当然のことでしょう。

さていきなりですが、皆さんは、特別支援教育でもっとも大切なことは何だと

思われますか？「発達障がい」に関する知識でしょうか？ 知能検査が正確に

実施できることでしょうか？ それとも個別の指導プランを作成する技術でしょうか？

もちろん、それらも大切なことですが、私がまず一番にあげたいのは「子どもが好きである」ということです。

どうでしょう、「それなら大丈夫」「子どもを好きな気持ちは誰にも負けない」という先生がたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか？

同じADHDという診断名を持つ子で

も、一人一人違います。自分の目の前にいる子を「すごいなあ」「おもしろい子だなあ」と思うアンテナがあれば、必ずその子の「いいところ」や「支援が必要なおところ」が見えてくるものです。そして、子どもを理解するということは、子どもから教えられる、ということ。「子どもを師とする」とも言いますが、そんな姿勢が重要なかもしれません。

「クラスを安定させること」が基本

次に大切なことは、「学級の安定を図る」ということです。「えっ、発達障がいを持つ子の特徴に合わせて個別に配慮するのが特別支援じゃないの？」と思われるかもしれませんが、実は、クラスの子どもたちと信頼関係を築き、集団の楽しさ、勉強のおもしろさを教えることが「支援の始まり」なのです。

子どもたちは、次に何をしたらいいのか、どう動けばいいのかがわからないと混乱します。混乱する子どもが多いと、おのずとクラスの雰囲気はバタバタ、ワサワサします。勝手におしゃべりする

子や、手いたずらする子、うろろう立ち歩く子も出てきてしまうかもしれません。そんな環境は発達障がいを持つ子にとってはとても不安定ですし、「他の子もやっているんだから自分も」と感じさせてしまう場合もあります。

ですから、クラスの雰囲気からバタバタ、ワサワサした感じをいち早く取り除くことで、発達障がいの子も落ち着いて過ごせる環境ができあがるのです。

「環境」を整える

「特別支援教育」というと、発達障がいを持つその子自身、その子1人にだけはたらきかけようとする発想が根強くあります。しかし、特に通常学級においては、その子を変えようとする前に、まず教室環境の整備を最優先するべきなのです。

数年前、ある先生からこんな相談を受けました。

ナカムラ先生「この子はADHDの傾向

が強くて、集中力に欠けているんです。授業中、よく物を拾っては手いたずらばかりしているんですよ」

阿部「どんな物で遊ぶんですか？」

ナカムラ先生「折り紙の手裏剣とか、紙くずとか、ボタンとか輪ゴムとか釘とか、なんでも遊びに使ってます」

阿部「そういう物はよく教室に落ちてい るんですか？」

ナカムラ先生「はい、そうですね」

皆さんはこのやりとりからナカムラ先生のクラスにどんなイメージを持たれるでしょうか？ 実は先生の教室はいつも雑然としていました。ゴミ箱のゴミはあふれているし、学級文庫の本は今にも崩れ落ちそう、床には3日前の給食で出たみかんの皮まで発見できました。

ここまで極端ではなくても、学校訪問をしていると、散らかり放題の教室をよく見かけます。そんな教室には、発達障がいを持つ子が問題行動をより起こしやすい、マイナスの刺激があふれているのです。

教室全体の整備

まずは、年間を通して絶えずいいねい実践したいサポートからあげてみましょう。



1日1回は教室を見まわす

登校前、あるいは放課後、子どもたちのいない教室をぐるっと見まわしましょう。教室の雰囲気、机や椅子、床、壁、掲示物、ゴミ箱、水槽などをチェックします。汚れていないか、破れているものや壊れているものはないか。

支援の基本は、物理的に子どもたちが学びやすく、居心地のよい落ち着いた環境をできる限り提供することです。



不要なものをはなるべく教室に置かない

以前うかがったある地域で、生徒指導上配慮を要するにもかかわらず、教室内に折れた傘や釘などが放置されている中学校を目にしたことがあります。安全面

に配慮して、即座に撤去しなくてはなりません。

また、低学年の指導で楽器を頻繁に活用される先生もいらつしやいますが、教卓周辺に置きっぱなしにすると、気が散ってしまう児童もいますので気をつけましょう。

3

ロッカーなどはカーテンで目隠しを

4

学級文庫は放課後整頓しておく

5

破損箇所はすみやかに修理を

『かいけつゾロリ』が大好きな子がいました。彼は1巻から順に並んでいないと気になって、並べ直そうと授業中何度も離席してしまいます。先生は注意ばかりしていましたが、本を読んだらきちんと戻すようクラス全体で気をつけ、指導を徹底した結果、その子は離席しなくなりました。彼のおかげで教室も整理されました。

壁などの一部を破損したまま放置すると、そこを集中的に蹴ったりして壊してしまう子がいます。

6

生き物の世話には気をつける

命を大切にする指導だとしても、死んでしまったザリガニなどは長期間放置せず、先生が声をかけクラスで弔ってあげましょう。枯れた草花も同様です。何か月も水替えをせず放置され緑色によどんだ水槽の中でもたくましく泳ぐ金魚の姿には感動さえ覚えてしまいますが、それ命の大切さは伝わるでしょうか？
驚かれるかもしれませんが、そのような教室が実際に存在するのです。

黒板とその周辺・掲示物を整える

集中しやすい環境を整えてあげれば、発達障がいの子の支援にかける負担も最小限ですむのです。黒板の周囲の環境整理について、以下にポイントをあげてみましょう。

7

黒板の板書スペースを確保(書くスペースを広くとる)

8

黒板につけた名前プレート(マグネット)は、使用後元の位置に整然と戻す

9

チョークの消し跡を残さない

10

黒板周辺の掲示はシンプルに(板書に注意を向けやすくするため)

11

剥がれてきた掲示物は放置せず、即座に貼り直す

12

破れた掲示物は直すか外す

13

長期貼っておくものはラミネートにする

14

不要になった掲示物はすみやかに外す

さまざまな支援ツールの 使用に際して

さて、基本的な掲示物だけでなく、この後ご紹介していく支援用の掲示物やツールについても、使用方法を整理しておきましょう。

15 ターゲットを絞る

子どもの問題行動を気にするあまり、あれもこれも直さなくてはと支援用の掲示物を貼りまわると、刺激過多になりまわすし、なにより目標がぼやけて、支援が散漫になってしまいます。的を絞った掲示がポイントです。

また、これらのツールは、ただ貼っておくだけではだんだん効果が薄れてきます。場面に応じて意識的に声かけし、ツールが機能するようにしましょう。

16 支援者自身にフィットした ツールを使用する

そのツールが、支援する皆さんにとつ

てしっくりくると感じられなければ、なかなか効果はあがらないでしょうし、長期にわたっての活用は困難でしょう。違和感があるツールをむりして使うより、自分にピンとくるツールを探して活用しましょう。

17 A君にうまくいったから B君にも、という感覚は×

発達障がいのある子どもたちも十人十色です。子どもによっては、他の子にうまく活用できたツールでも効果があがらないことも。そんな場合は、その子自身をよく観察して、その子らしさに合わせたツールとなるよう、見直してみてください。

18 クラスメートの反応を考 える

特定の子に向けての掲示物などは、他の子どもたちがそれをどう思うかも考慮に入れましょう。その子が引け目に感じたり、からかいの種になったりする可能性があれば、再検討しましょう。また、参観日などで保護者の目に触れる場合に

も同様の配慮が必要です。

19 つけやすい、取り出しやすい、外しやすいが理想

20 よけいな装飾はせず、なるべくシンプルに

21 使うときの適切なタイミングを 考える

何事にもそれがより効力を発揮するタイミングというものがありません。どういう場面で、どのタイミングでそのツールを使うのが効果的かを検討しましょう。

22 いつか使わなくてもよくなる状態を常に意識する

23 思いやりをこめて

そのツールに、支援者の思いやりや愛情が込められていれば、効果は倍増することとは言ってもありません。

整理整頓の支援

教室の整備は、先生お一人でいくら頑張っても限界がありますよね。ですから、整理整頓を苦手とする子どもたちへの支援を行い、整った環境を保ちましょう。

24

学級内のルールを決める

廊下のフックにかける物、机の横にかける物を決めておく、また「椅子の下には物を置かない」などの基本的なルールを決めておくことが大切です。

25

物や道具の定位置、戻す位置を示す

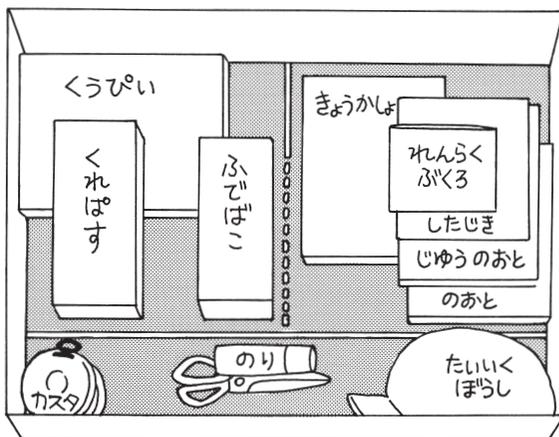
片付ける際の、視覚的手がかりを提示しましょう（下のイラスト参照）。

26

片付けるタイミングを指示する

適切なタイミングで片付けることが苦手な子が多いので、片付けの「キュー」を出してあげましょう。

お道具箱の整理



27

週末に机の中を整理させる

週末には個別に声かけて、机の中の整理を援助しましょう。紙くずやゴミに思えるものでも一方的に捨てたりせず、その子の意見を聞きながら整理します。さて、前述のナカムラ先生ですが、現在は教室をきれいに保つためにも努力をしてくださっています。

ナカムラ先生「よけいなものがあると、

他の子どもどんどん落ち着かなくなるので、そうじせざるを得なくなりました。今は当たり前前に整頓ができるようになってます。学級も落ち着いて、授業がしやすくなりました」

クラスの子どもたちと本気で遊ぶ時間を持つ

また、特別支援で難しいのは、先生方の個別の配慮に、「なぜあの子だけ許されるの?」「あいつばかりずるい」という声をあげるクラスメートが出てくる場合です。「ひいきだ」という不満の声は、実は「自分も先生にかわいがってほしい」「こっちを見てほしい」という気持ちの裏返しなのです。

子どもたちにそんな気持ちを抱かせないためには、まず休み時間、子どもたちと本気で遊ぶことをお勧めします。百の言葉で説得するより、毎日10分でも一緒に汗をかきながら心を通わせたほうが、子どもたちは納得してくれることでしょう。

新年度のなるべく早いうちから多くの子どもたちと「心」を通わせていくことによって、今後必要となるであろう「発達障がいの子にだけ許すこと」や「特定の子に他の子より多くかかわって指導すること」をクラスメートが認めてくれる素地ができていきます。つまり、先生のやることを子どもたちが「大目に見られる」ようになるのです。

この期間は、クラスが「さりげなく先生を援助してくれる」土壌をつくる大切な時期なのです。

1 サツとツール

『U-SST ソーシャルスキルワーク』

通常学級で特定の児童に個別の対応をすることだけが特別支援教育ではありません。「クラスを育てること」こそが、子どもにとっても、先生にとっても、大変重要なことなのです。

しかしながら、クラスを育むためには、先生方の日々の努力、クラスの子どもたちとの交流の積み重ねが第一で、それに役立つツールというものは、なかなかないと言わざるを得ないのが現状でした。

ですがこのたび、先生方のお役に立てるツールを一冊の本として発行することができました。それがこの『U-SST ソーシャルスキルワーク』、クラスの子どもたちの人間関係を育てるワークブックです。U-SSTとは、ユニバーサル・ソーシャルスキルトレーニングの略で、若手からベテランの先生まで幅広く活用していただけるものです。クラスづくりの即戦力となると思います。ぜひ、先生方の力強い「相棒」にしてください。



(阿部利彦／監修『U-SST ソーシャルスキルワーク』日本標準、2009年)